

土地に刻まれた  
暮らしと信仰

# 「神宿る島」

宗像・沖ノ島と関連遺産群

— 宗像の風景 —

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群 —宗像の風景—  
初版 平成28年3月

発行「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議  
(事務局)福岡県世界遺産登録推進室  
〒812-8577 福岡市博多区東公園7-7 TEL: 092-643-3162  
<http://www.okinoshima-heritage.jp/>

©「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議  
編集協力/一般社団法人九州のムラ デザイン/永田修平  
印刷/ダイヤモンド秀巧社印刷株式会社

宗像大社沖津宮(沖ノ島)  
祭神 田心姫神

宗像大社沖津宮遙拝所

宗像大社中津宮  
祭神 湍津姫神

新原・奴山古墳群

宗像大社辺津宮  
祭神 市杵島姫神

# 古代から 受け継がれる風景

## 宗像の景観とは？

日本列島と朝鮮半島を結ぶ玄界灘。海に浮かぶ沖ノ島の姿に、古来より人々は畏敬の念を抱き航海安全の祈りを捧げてきました。信仰の場は沖ノ島から大島、九州本土の三ヶ所に広がり、海によって結ばれる広大な空間に宗像三女神を祀る宗像大社が成立しました。玄界灘の自然の中で、宗像三女神信仰は育まれ、宗像地域の人々によって今も守り、受け継がれています。

宗像地域の景観の魅力は、目に見える眺めの美しさだけではありません。この土地に暮らし、生業を営み、信仰を担った人々の足跡が、海山森川とそこかしこに刻まれています。景観は、長い時間をかけて形づくられ、今もなお人々の営みと共に緩やかに変化し続けています。目の前の何気ない風景の中に、宗像の土地の生い立ちを物語る歴史や意味が潜んでいます。



宗像地域の地形



「筑前国郡絵図宗像郡図」、福岡県立図書館所蔵  
江戸時代の宗像郡（現在の宗像市・福津市）の絵図。

# 山

## 峰々に囲まれる 神郡宗像

現在の福岡県の宗像市と福津市は、かつて宗像郡と呼ばれ、古代には全国で八つしかない「神郡」の一つに定められた歴史的に一体的な地域でした。宗像地域は、北は玄界灘に面して大島・地島等の島々が点在し、東には湯川山・孔大寺山・金山・城山の四塚連山、西には対馬見山・在自山・宮地岳等の山々が連なります。大島の御嶽山山頂から九州本土側を見渡すと、山と島の峰々によって囲まれたまとまりのある地形が見て取れます。一方、視線を北に向けると沖ノ島、そして朝鮮半島へと続く玄界灘を一望できます。

かつて宗像地域一帯を支配したのが古代豪族宗像氏です。宗像氏は周囲を山々に囲まれた釣川流域を拠点に、九州北部から朝鮮半島へと向かう「海の道」を支配し、大陸との交流や沖ノ島での祭祀

を担いました。沖ノ島での祭祀は、大島の御嶽山や九州本土の宗像山へと広がり、海の守り神である宗像三女神を祀る宗像大社三宮が成立します。古来の航海は島伝いに次々と船を進めていくもので、島や山が航海の重要な目印でした。中世の宗像大社の「嶽祭」という神事では、東の湯川山（依岳）や南の許斐山、大島の御嶽山への雲のかかり具合を問うやりとりが行われ、海の神のみならず山の神に対しても航海安全の祈りを捧げていたようです。

宗像地域を取り囲む山々や丘陵には、その長い歴史を反映して多くの遺跡や歴史が秘められています。神社や寺院のみならず、無数の古墳群や中世の宗像大宮司家が築いた山城等がひっそりと眠り、現代の私たちと共存しています。



大島の御嶽山山頂から九州本土への眺望

# 自然を介して カミと人が出会う



宗像大社末社の分布図。旧宗像郡の多くの集落に末社が広がっている。



左／沖ノ島は島自体が御神体であり、太古の自然がほぼ手つかずのまま残されている。  
下／御嶽山参道。御嶽山は中津宮の鎮守の森であり、大島住民の里山でもある。



# 自然崇拜が息づく鎮守の森

# 杜

かつて「神郡」であった宗像地域には、各集落を守る氏神として多くの宗像大社の末社があります。神社は古くには「モリ」とも読まれます。神社に社殿ができる遥か昔、山や岩や木といった自然が神の宿る場所(神奈備)とされました。森そのものが「神社」であり、「鎮守の森」、「社叢」ともいわれます。宗像地域では、宗像大社と集落の神社(氏神)、二つの神社の氏子を兼ねている場合も多く、境内の清掃や神社の祭礼行事に参加するなど、日々の暮らしの中で神社を大切に守り続けています。

先人達は、森を切り開き田畑や集落をつくりながらも、山の尾根や急斜面、海に突き出た岬、森の水源等、人が干渉してはいけない自然や重要な場所に、神社や祠を設け、鎮守の森として守ってきました。

古墳もまた時代が経つと木々が生い茂って森となり、神社となったものもあります。

中津宮が鎮座する御嶽山は、昭和30年代まで薪の採取や炭焼きなど、雑木林の里山として利用されてきました。本殿の周囲にはシイやカシ等の照葉樹の森が残されており、泉が湧き出る「天之真名井」には水神様の祠が祀られています。また、辺津宮が鎮座する宗像山の下高宮は、宗像三女神降臨の地との伝承があり、上高宮は禁足地として人の立ち入りが禁止されています。

宗像地域には、鎮守の森がくまなく広がっています。祭の場であり、多様な動植物の生息地でもあるこれらの森には、自然と人々の共生の歴史と伝統が深く根付いています。

辺津宮本殿の右奥にそびえる宗像山。





『勝浦嶽并海中道』『筑前国続風土記附録』寛政9年（1797）、個人蔵  
江戸時代の勝浦潟の風景。海岸の砂州は松原が続く「海中道」と呼ばれた景勝地であり、干拓地には塩焼きの煙が上り、外海とつながる津屋崎の港には帆船が集まる。丘陵には茅葺民家の農村集落と共に、「大塚」「剣塚」といった古墳に由来する地名が見える。



宗像地域の入海範囲と大型古墳の分布。その他にも山中には無数の古墳群が現存する。



# 入海

青々とした水田は  
古代の海を物語る

勝浦潟（桂潟）と釣川はかつて入海でした。宗像地域には四世紀から七世紀にかけて築かれた約二八〇〇基もの古墳があり、その多くは入海に面した台地や丘陵に位置します。沖ノ島祭祀を担い、対外交流に活躍した宗像氏は、その死後も沖ノ島へと続く海を強く意識した場所に古墳群を築いたのでした。

その中でも新原・奴山古墳群は、入海に突き出した台地上に前方後円墳や円墳、方墳と大小様々な古墳が集中しており、大島や玄界灘を一望できます。かつてこの海域を行き交った船からも古墳群は良く見え、この地域を支配する宗像氏の存在を象徴するランドマークであったと思われます。

砂州や砂丘に抱かれた入海は天然の良港で、海と内陸をつなぐ交通の拠点として地域を支えました。

勝浦潟の周囲には、かつて船を係留するために使っていた「舟つなぎ石」が今もいくつが残っています。入海は人々の暮らしの営みの中で姿を変えます。江戸時代には、福岡藩によって海岸線に防風林・防砂林として松が植林され、入海は塩田や新田の開発によって干拓され、現在へ至ります。

現在の田園風景は、地元農家の何代にもわたる営農の積み重ねによって形づくられ、維持されています。水田にたたく古墳もまた、地元住民によって草刈り等の手入れにより守られています。役目を終えたかつての入海は水田へと姿を変えましたが、大草原のように広がる田園風景は、この場所で船が行き交っていた往時の風景を想起させてくれます。



新原・奴山古墳群を見下ろす高台から。大島、さらには沖ノ島へと続く海域が一望できます。

写真／吉村靖徳



悠々と流れる釣川（下流域）



「田島宮社頭古絵図」、寛永年間（1624-1644）成立  
 （出典『宗像神社史』上巻）  
 中世の辺津宮境内の様子を描いたとされる境内図。  
 境内を横切る参道は釣川へとつながる。

# 川

## 釣川を行き交う歴史と風景



昭和30年代の辺津宮の景観  
 （出典『宗像神社史』上巻）  
 宗像山から伸びる中央の森が辺津宮。かつての入海は水田となり、釣川の水害を避けるように、山麓の微高地に集落が形成されている。

山々からのいくつもの支流が合わさって玄界灘へ注ぐ釣川は、古代から今日まで宗像地域の水源であり、人々の暮らしは川の流れと共にありました。「むなかた」の語源は諸説ありますが、釣川の上流まで海が入り込み干潟を形成していたことから「沼無潟<sup>むなかつ</sup>」・「空潟<sup>むなかつ</sup>」ともいわれています。川は山を削り、流れ出た土砂が積もり積もって平野をつくります。弥生時代に稲作が始まって以来、釣川を水源に平野は水田となり、高台には人々が定住してムラが形成されます。古代豪族の宗像氏は、釣川流域を拠点に内陸部の農村と沿岸部の漁村を支配しており、大陸からの先進文化も釣川をさかのぼってこの土地にもたらされました。

辺津宮と釣川もまた密接な関係にあります。「日本書紀」に「海浜<sup>つみや</sup>」と記されている通り、辺津宮の傍を流れる釣川は古代には入海でした。入海を望む宗像山の中腹で祭祀が行われ、やがて麓に社殿が築かれ宗像大社の中心として多くの神事が行われます。

中世の宗像大社には海や川を介した神事が数多くあり、最大の神事の一つである放生会の「船闘<sup>ふなくさ</sup>神事」では、鐘崎・神湊・勝浦浜・津屋崎といった宗像の漁村から供進された神船に神輿を載せて、釣川で競漕させていました。

江戸時代には、釣川は堆積した土砂により舟が漕上できなくなり、釣川一帯が干拓され田園となりました。「田島」という地名が示す様に、鎮守の森に包まれた辺津宮は、田に浮かぶ島のように田園風景の中に溶け込んでいます。

「鐘ヶ崎や神の湊のさびた味は捨て難きものであり、磯鼻先を崖の上から見下ろして椀形の空間を感じらるる当りはあまり人の口にもされぬ奇景と思います」と宗像の風景について語ったのは、洋画家の坂本繁二郎。坂本は、「殆ど全線松と岩と砂浜の連続である光景は須磨や明石の比ではなく、賞美すべきものと思います」とも述べ、そこに広がる風景の美しさを絶賛し、その思いを作品へと昇華させました。

その坂本が『日本風景版画 筑紫之部』のひとつとして大正七年に制作した「神湊」には、勝浦浜の海岸から草崎と勝島、遠くに大島をのぞむ様子が描かれています。遠景に黒色で描かれた島々はシルエットのようであり、画面の大部分を占める藍色の海とその上に広がる空にはグラデーションがほどこされることでその深みが表現され、そこに白い波が添えられることで画面に動きがもたらされています。

ます。大胆な色と構図で構成された本作からは、坂本が神湊の海景に魅了された様子が伝わってきます。

近代において観光や写生旅行がブームとなるなか、日本各地に存在する自然の美しさが画家たちのまなざしを通して再発見され、次々と風景画が描かれました。画家たちは、名所や旧蹟ではないありのままの自然の美しさを自らの目で選び取り、変化に富む地形や幽境の発見に喜びを感じたのです。

湾曲する海岸線や白砂青松、深く澄んだ紺碧の海の色は、美しい自然の風景を求めた彼ら画家たちにとって、絵に描くべき絶好の対象であったことは想像に難くありません。宗像という地は、古代から連綿とつらなる長い歴史に加え、その地に身を置いてそこに広がる風景と対峙した画家たちの豊かな想像力をかきたてた、豊饒の海とも言える場所であったでしょう。



中村研一  
「日本海沖ノ島」昭和11年(1936)、宗像市蔵

湾曲する曲線を用い、波止場から太鼓岩を右手に見ながら、沖ノ島を見上げるような視点とられ、絵の上部には沖津宮の鳥居が描かれている。中村は水雷敷設艦「沖島」の士官室に飾る絵として海軍から依頼を受け、沖ノ島に9日間上陸してスケッチを重ねた後に本作を完成させた。



古賀春江(1895-1933、久留米市生まれ)  
「二階より」大正11年(1922)、石橋財団石橋美術館蔵

大正11年に松田諦晶とともに滞在した鐘崎の酒屋旅館の二階から見た風景で、民家の蔭屋根越しの海の向こうには大島と地島が見える。実景に基づきつつも、○や△や□などといった形で風景を捉えようとする、造形的志向がみとれる。



松田諦晶(1886-1961、久留米市生まれ)  
「鐘ヶ崎風景(蔭家と松)」大正11年(1922)、個人蔵

古賀春江とともに大正11年に滞在した鐘崎の風景を主題にしたもの。手前に大きく描かれたうねる松の木ごとに、蔭葺き屋根の家と海をのぞき見るような構図がとられている。濃い緑を多用する力強い筆触でまとめられ、形は大胆にデフォルメされている。



坂本繁二郎(1882-1969、久留米市生まれ)  
「日本風景版画 筑紫之部」より「神湊」大正7年(1918)

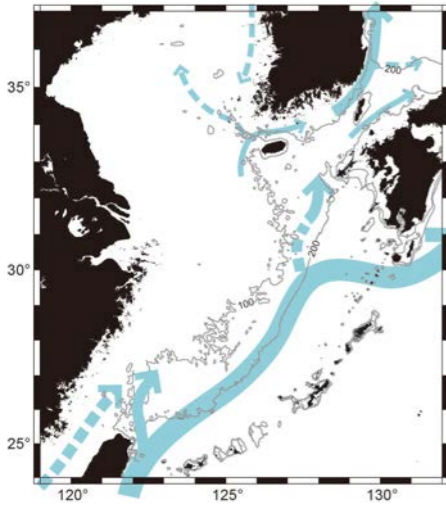
## — 風景へのまなざし —

### 近代美術に描かれた宗像



中村研一(1895-1967、宗像市生まれ)  
「津屋崎渡ル海岸」明治41年(1908)、  
中村研一・琢二生家美術館蔵

14歳の頃に描かれた水彩画。画家のふるさとにほど近い、津屋崎の渡半島付近の海岸を描くものであり、画面の中央には「画中画」として、同じ場所を別のアングルから見たであろう窓の浦の風景が描かれている。



対馬海流の流路（水産大学校滝川哲太郎作成）  
黒潮から分岐した対馬海流は、九州の西方を通り、  
対馬海峡を抜けて日本海を北上する。

## 浜に打ち上がる 海の恵みと厄介物

宗像・沖ノ島世界遺産市民  
の会による海岸清掃の様子。  
（沖津宮遙拝所付近）



## 海から寄り来るもの

# 浜

宗像地域は、対馬海流という東アジア沿岸の海の大動脈に面します。この海流に乗って人々は海を渡り、文化を運び、豊かな海の恩恵を得てきました。海流は大地をも造形します。波によって削られた土砂が沿岸流に乗って海岸に運ばれ、長い時間をかけて砂浜や砂丘が形成されます。宗像地域の海岸は、北から鐘崎、草崎、楯崎という岬や鼻が玄界灘に突き出て、その間には緩やかな弧状を描く白い砂浜と緑の松原が続きます。

「広げたパラソルの縁」と形容される自然海岸には、海流や風の影響を受けながら多くの漂着物が打ち上がります。漂着物が寄る季節は冬。大陸から吹く北西の季節風で海は荒れ、黒潮や対馬海流に乗った様々な物が浜一面に広がります。

漂着物は様々な歴史を物語ります。玄界灘は、波が荒く潮流も速いため、航海の難所として有名です。

古来より、宗像の浜に難破した船から流れついた積み荷、いわゆる「寄物」は宗像大社の神物とされ、末社の修理費用に当てられました。これは時の朝廷から正式に認められた特権で、この海域は宗像大社の治める神聖な領域ともいうべき場所でした。

しかし、近年ではビニール袋やプラスチック製の容器、発泡スチロール等の大量のゴミも運ばれます。また、松食い虫等の被害により松原の荒廃も目立つようになりました。美しい海岸を未来へ残したい。こうした思いから、海岸清掃や松の苗木の植樹など、自治会やボランティア団体、学校、企業等が海岸の保全活動に取り組んでいます。白砂青松と呼ぶに相応しい美しい海岸は、こうした人々のためまぬ努力によって守られています。



勝浦浜の海岸。草崎と勝島、遠くに大島を望む。



玄界灘の海岸で40年以上、漂着物の研究を行ってきた石井忠先生。ご自宅には椰子の実やオウムガイ等、採集した漂着物の数々が保管されている。





みあれ祭の海上神幸

沖津宮と中津宮の女神を載せた二隻の御座船と先導船を先頭に、宗像七浦の漁船数百隻が大島から神湊まで海上神幸します。大漁旗をなびかせ玄界灘を進む漁船団の姿は壮観であり、現在の宗像三女神信仰を象徴する「海」の神事です。

漁網の手入れをするなど、海と陸の地形を活かした人々の暮らしが風景ににじみ出ています。漁師達にとって、玄界灘の海は豊かな恵みをもたらす穏やかな時であれば、荒れ狂う時もあります。宗像の漁師達にとって、海上の安全を守る沖ノ島や宗像三女神への信仰は特別なものです。宗像大社の秋季大祭の初日、毎年十月一日に行われる「みあれ祭」は、沖津宮、中津宮、辺津宮の宗像三女神が年に一度、辺津宮にそろって神迎えるの神事です。

津屋崎漁港でのイカ干し



鐘崎の海女漁



# 浦

浦とは、入江や湾といった海辺の集落や港町を指します。奥まった入江は安全に船が出入りでき、磯は魚や貝、海藻等の海の幸の宝庫です。

古来より玄界灘沿岸の浦々には、豊富な海の知識と操船技術を活かして漁業や航海に従事した海の民、海人が暮らしていました。

海人の系譜は「宗像七浦」(鐘崎、地島、大島、神湊、勝浦、津屋崎、福岡)と総称される玄界灘沿岸の浦々に受け継がれていきます。七浦といっても、潜水漁業や捕鯨でにぎわった漁村もあれば、製塩業や商船で栄えた港町もあるなど、海との関わり方は様々で、各浦の風景も異なります。鐘崎の漁村に目を向けると、漁師の家が海に向かって立ち並び、背後に迫る山にはかつて農地が広がっていました。港には漁船が留まり、魚や海藻類を干し、

海に感謝し、海と共に生きる

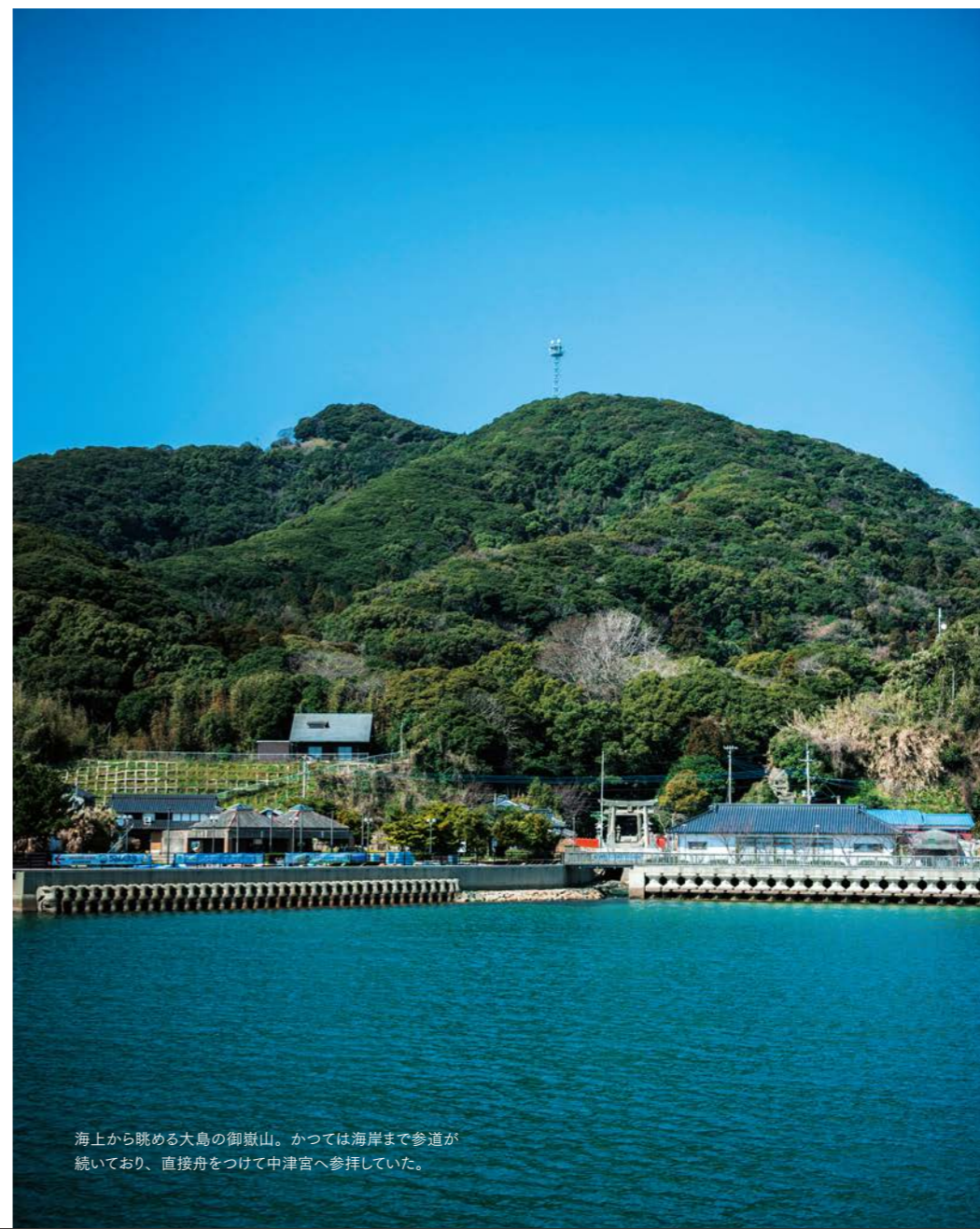


海上からみる鐘崎の町並み。鐘崎は日本海側の海女発祥の地とされる。

# 島



昭和30年代の大島(出典『宗像神社史』上巻)  
小高い丘の上の中津宮は鎮守の森に覆われ、海辺に寄り添うように漁師の民家が立ち並ぶ。



海上から眺める大島の御嶽山。かつては海岸まで参道が続いており、直接舟をつけて中津宮へ参拝していた。

## 漁師達が受け継ぐ島の信仰

大島の漁師達は、今も昔も自分たちが沖ノ島を守ってきたとの自負があり、畏敬の念と親しみを込めて「沖ノ島様」、「おいわずさま不言様」と呼びます。大島の漁師達にとって沖ノ島の海は絶好の漁場で、昭和30年代まで沖ノ島の波止場に小屋をかけて住み込みで漁をしていました。海が荒れ漁に出られない時は沖津宮を清掃し、漁の帰りには獲った魚を献上するなど、日々の感謝を欠かしません。沖ノ島は豊漁をもたらすだけでなく、漁師達の海の守り神でもあるのです。

海に生きる人々にとって、航海は常に危険と隣り合わせでした。そのため、海から仰ぎみる島や山など、目標物となる自然の地形が神の存在を意識する場になったと思われまます。遙か昔、荒れ狂う玄界灘を越えていった人々は、波間に現れる沖ノ島を拠り所として航海安全を祈るようになり、いつしか神宿る島として信仰の対象としたのです。江戸時代には、大島の漁師達は沖ノ島と大島の間の海域を「神中」と呼び、海上で沖ノ島に祈りを捧げていました。

大島の御嶽山もまた航海者達の厚い信仰を集めてきました。漁師達は、「山アテ」といって、海上から眺める島や山、岬を目印に航行し、漁場の位置を確認していました。御嶽山の山頂には御嶽神社が鎮座し、そこから伸びる尾根は参道となつて山麓の中津宮本殿に至り、鳥居をくぐって海へ届きます。中津宮は海を望み、海からも望まれます。大島から船で沖へ出ると、海辺の鳥居は水平線の下に消え、大島の輪郭の中で御嶽山は実際目立ちます。

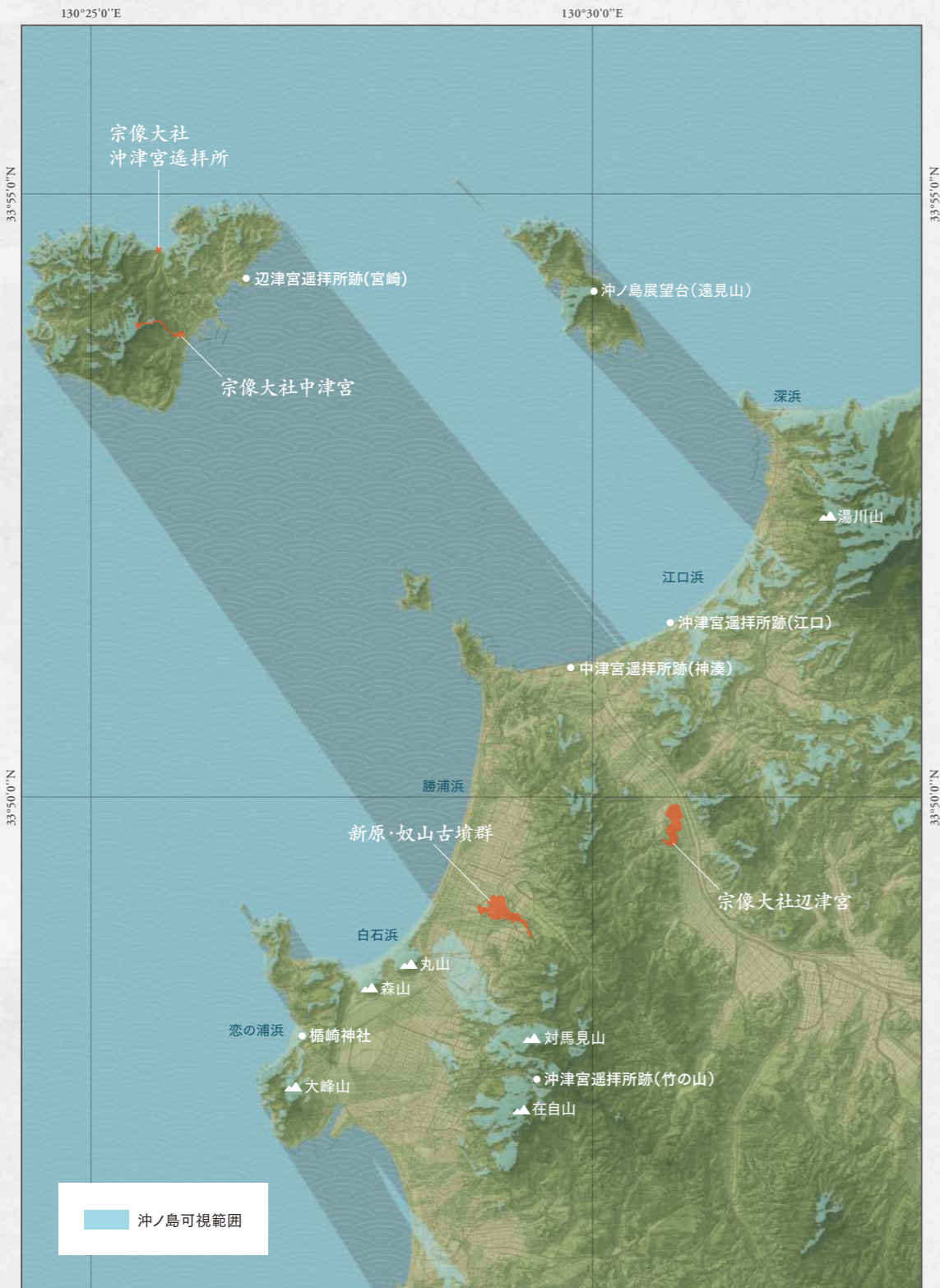
大島へ行き来する船上の風景からは、陸から海、海から陸へと人々の暮らしの意識を強く感じる事ができます。



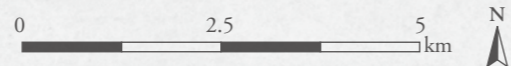
「難船図(絵馬) 大正11年(1922)、金刀比羅神社所蔵  
玄海灘の海難事故で助かった人々が、金刀比羅神社(福津市在自)に感謝して奉納した絵馬。御嶽山上空に浮かぶ御幣から船団へと伸びる光が神の靈験を象徴する。



「大島図」『筑前国続風土記附録』  
寛政9年(1797)、個人蔵  
中央には中津宮が鎮座する御嶽山、北側には沖津宮遙拝所、海の向こうに沖ノ島が描かれる。江戸時代、大島は島守が沖ノ島へ渡る際に心身を清める潔斎の島だった。



沖ノ島の可視範囲マップ  
GIS(地理情報システム)による沖ノ島(頂上)の可視領域解析結果を基に作成。



昭和30年代の沖津宮遙拝所。水平線上に沖ノ島の島影が見える。(出典『沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡』)

# 遥拝の伝統

## 風景にカミが宿る

玄界灘に浮かぶ沖ノ島は、厳しい禁忌によって一般に立入ることはできません。そのため海を隔てた大島の北端に沖津宮遙拝所が設けられました。「遥拝」とは、遙か遠くから拝むことであり、沖津宮遙拝所は沖ノ島をご神体とする拝殿としての役割をもちます。毎年春・秋の沖津宮大祭は沖津宮遙拝所で行われ、社殿の扉を開きそこから沖ノ島を遙拝します。

九州本土の海岸や高台にも沖ノ島を望むことができる地点があり、中にはかつて遙拝所が設けられていた場所もあります。江戸時代には、九州本土の江口浜に沖津宮・中津宮の遙拝所が存在し、福岡藩主が領内を巡見する際に辺津宮を参拝した後、ここから両宮を遙拝しました。また、大島南岸の宮崎には辺津宮への遙拝所があったとされ、海で隔てられた三宮が遙拝によって相互に結ばれていたことがわかります。その他、遠く離れた福岡城下町の荒津山(福岡市西公園)や魚町(福岡市赤坂付近)にも沖津宮遙拝所が設けられていた記録が残っています。

宗像地域の人々は、日々の暮らしの中でも海上安全、豊漁祈願、五穀豊穰、家内安全と様々な意味を込めて沖ノ島を遙拝していました。例えば大島の漁師の妻は、沖ノ島で漁をする夫の無事を願い、沖津宮遙拝所から祈りを捧げていました。また本土でも、かつては「沖ノ島籠り」と呼ばれる風習があり、田植えが終わった夏頃、集落近くの沖ノ島が見える浜辺や山の高台に籠り、神酒・赤飯等をお供え、田植えが無事終わったことへの感謝や無病息災を願って沖ノ島を遙拝していました。宗像地域の人々は、風景に神の気配を感じつつ、沖ノ島や宗像三女神への信仰を大切に守り続けてきたと言えるでしょう。

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群

# 景観保全の考え方

理念

沖ノ島と共にある祈りと暮らしの景観を守り、育て、次代へ引き継ぐ

「神宿る島」沖ノ島に対する信仰は、玄界灘の雄大な自然の中で生まれ宗像三女神信仰として発展しました。宗像地域に暮らし、生業を営み続けてきた人々によって信仰は生まれ、今も受け継がれています。宗像地域の景観は、連続と続く人々の暮らしや信仰の歴史が積み重なって形作られており、景観を守ることは、地域の自然や暮らし、伝統や文化、そして本遺産群を守ることへとつながります。先人から受け継いだ宗像地域の景観を守り、育て、次代へ引き継いでいきます。

## 5つの方針

### 一 沖ノ島や自然への眺望を守る

宗像地域では、沖ノ島や宗像三女神に対する信仰と共に、豊かな自然が大切に守られてきました。沖ノ島や古代東アジアとの交流の舞台となった玄界灘への眺望、その骨格となる自然の地形を守ります。

### 二 暮らしと祭礼の場を守る

宗像地域の人々の暮らしの中で、沖ノ島や宗像大社への信仰は受け継がれています。この土地で人々が暮らし続けてきた、生活や生業の場、神社等の祭礼の場の景観を守ります。

### 三 つながりを感じる景観を創る

宗像地域の景観は、自然や風土、古代から脈々と続く歴史、人々の暮らしや信仰が重なりあうことで成り立っています。地域の歴史的背景や自然との調和に配慮し、本遺産群の一体感を実感できるように景観を形成します。

### 四 地域と共に担う

遺産の保護や景観の保全は、法や条例、制度だけでは守れません。地域全体で価値観を共有し、共に行動することが重要です。地域住民、市民活動団体、事業者、行政機関等の関係者が、地域内外の人々と協働して宗像地域の景観を守り、育てます。

### 五 世界遺産として未来へ伝える

世界遺産の最大の目的は、人類共通の遺産として後世に継承していくことです。宗像地域の景観と共に、本遺産群の世界遺産としての価値を守り、伝え、次代へ継承します。

遺産群の位置および緩衝地帯の範囲



※「緩衝地帯(バッファゾーン)」とは、世界遺産としての価値を保護するために、遺産周辺に設けられる景観を保全する区域。

ふるさとの風景を  
未来へ受け継いでいくために

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群は、一六〇〇年以上もの時を越えて、宗像地域の人々によって守り伝えられてきた遺産群です。二〇〇九年にユネスコの世界遺産暫定リストに記載されたことを契機として、福岡県・宗像市・福津市は、市民団体、民間団体等で構成される「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議を設立し、世界遺産登録活動に取り組んでいます。

世界遺産の目的は、人類共通の遺産として後世に継承していくことです。故郷の宝を世界の宝へ。世界遺産へ登録することが終着点ではありません。本遺産群をいかに守り、伝えていくかが重要です。沖ノ島や古代遺跡、古墳や神社だけを守ればいいのではなく、玄界灘の大自然、そこに暮らす人々の生活・生業や信仰等、故郷の景観を守っていくことが、世界遺産を次の世代に継承していくことにつながるものと考えます。

景観をいかに守り、育んでいくのか。このことは地域のまちづくりと密接に関わる課題でもあります。私達は、地域の人々と共に、遺産群の保護と景観を保全する取り組みを進めていきます。